青春スクロール 私の母校

東京都立西高校④（東京都杉並区）

勉強できるのはかっこいい！

鉄道研究部部長だった大宮理さん。生徒会の予算会議で「根回し」して部の予算を増やしたことも。「高校が一つの社会だったんです」

勉強はできるが運動は苦手で、周囲となじめない。河合塾講師で化学の参考書シリーズの著作も知られる大宮理さん（44、1990年卒）は、そんな中学生だった。

それが西高に入ると、勉強ができることはかっこいい、という文化。得意不得意も個性として認め合う。「生きてるってこんなに楽しいんだ！と思いました」

マラソン大会をさぼってのゲーム中、先生に見つかった。「科学の進んだ現代に古代の競技は無意味」と苦し紛れに主張すると、先生は最後まで聞き「では走らなくて良いが、勉強しろ」。人に教える立場になった今、「当時の先生たちには教育者としての器量の大きさを感じます」。

3年生の時は1人で原子力発電所の問題を調べて展示。浪人時代からは薬害エイズ裁判の支援活動に夢中になった。理系として、環境問題や困っている人の問題を考えずにいられなかった。

早稲田大学理工学部に進学したが、家計は厳しい。学費は奨学金と、宅配便の仕分けや塾講師などのアルバイトでまかなった。入学がかなわなかった東京大学を見返そうと、予備校講師になった。

卒業式で大宮さんと共に答辞を読んだのが、国立科学博物館人類研究部の研究主幹、河野礼子さん（44、90年卒）。化石などの歯に注目して人類の進化の過程を研究している。

西高では当時、女子はクラスの3分の1ほど。「男には負けない！」と思っていた。軟式テニス部の練習で日焼けした肌にショートカット。昼休みは大宮さんたちと議論を楽しんでいた。「やりたいことをやらせてくれた西高に感謝しています」

勉強は「定期テスト対策くらい」というが成績は優秀。「試験に対する耐性があるというか、テストにうまく取り組めるんだと思います」

西高OBの父は地球物理学者。母から「女が働くなら、時間に自由な大学教授がいい」と言われ、将来はなんとなくそう思っていた。

東大から同大大学院へ。はじめは植物学を学んだが「細胞は小さすぎて見えない」と興味を持てず、模索を続けた結果、人類学教室にたどり着いた。

歯のエナメル質の厚さなどを緻密に計測する研究は、当時CT（コンピューター断層撮影）が普及してきたこともあり、方法論を確立する時期にあった。「どうしたらうまくいくのか考えるのがすごく好き」なのでぴったり。専門家になった。

「研究者はすごく楽しいですよ」

（編集委員・吉田由紀）

河野礼子さん。「数学の時間、先生に『河野がうなずいているということは、みんなわかりましたね』なんてイジられてました」